

梶田 叡一著「教師・学校・実践研究 人間教育の基盤を創る」

金子書房 2005年8月25日刊を読む

新時代の教師像を問う - 教え育てる主役は教師である -

1. (1) 今、「教える」ということの意義が、非常に一面的に語られすぎていると思う。例えば「教育は『育』だけ考えていればいい」と言う人がいるが、それでいいなら学校はいらない。
- (2) 「先達はあらまほしきことなり」(徒然草)ということ为先人も言っている。岩清水八幡宮まで行ったのに、上に本当の社があると知らずに下を拝んだだけで帰ってきたという人がいるが、なぜそうなったかという、それは先達がいなかったから。
- (3) つまり、より深く見えている人が「これがこうだよ」と指し示さなくてはいけないことがある。そのことを忘れて「育」だけでいいと言うのは間違いだ。
2. (1) また、逆に「教」だけでいいかという、そうではない。子どもの事情に関係なく、「これが大事だよ、こう考えるんだよ」と教え込むだけでは教育にならない。
- (2) なぜ「教育」と言われるのか。「教育」は教えるだけでも、育てるだけでもいけない。両者は表裏一体となるもの、現象的には、先生が前に出る場合もあれば後ろに引っ込む場合もある。
- (3) しかし教師として、ご縁があって出会った子どもの将来に私は責任を持っているんだ、という自覚の裏付けなしには、どうにもならない。
- (4) そうした裏付けを持ちつつ、子どもに対して指示したり、教えたりするわけであり、場合によってはいくらイライラしても子どもがやることを見守ったまま動かないでいるわけである。
3. (1) こうしたことは日本、あるいは東洋では常識だった。教師の概念として、今では西洋的な発想が多く入ってきて、まるで「教え屋さん」のように考えられてしまっていることがある。古代ギリシャでは教師とはもともと知識奴隷の仕事だったことから、西洋では今で

も、教師のイメージも待遇も、東洋の場合とは根本的に異なっていることに注意が必要だ。

(2)中国や台湾、韓国などで「教師の日」が作られているように、東洋では教師は子どもに知識を与えるだけでなく、人格形成にまで責任を持つ存在だというイメージがある。そして社会的には教師は知識人の典型であり、世の中の木鐸でもあった。日本では古来、そういう発想のなかで教育とか教師が語られてきたことを忘れてはならない。

4. 歌舞伎やお茶、お花の世界では、伝統的に「守・破・離」と言われている。

(1)「守」は師が学習者に高い世界、深い世界を示し、それを忠実に学ばせる段階である。これがなかったら独善になってしまって、高いところにまで至ることが不可能になる。教師が子どもと一緒にただ遊び回っていれば子どもは何でも学びとってくれる、というのはとんでもない話だ。一緒に遊ぶことも大切だが、子どもにない高い世界、深い世界を指し示さなくてはいけない。

(2)そして学習者は、師の世界をある程度マスターしたら自分なりにそれを破る。学習者自身が自分をどう出していくかという悪戦苦闘が始まる。

(3)そういう過程を通じて最後には、その苦闘も乗り越え、師からも離れて一人旅に出るようになる(離)、と言われてきたのである。

5. (1)また、浄土真宗にも同様の意味の言葉で「聞思修」という言葉がある。聞く、思う、修める、という。学問の過程も同じような構造を持っている。「聞」は教師主導、「思」は学習者自身が自分のなかで思い巡らせること、「修」は自分の責任で自分の世界を深めていくこと。

(2)さらには法華経の方便品のなかの「開示悟入」というのもまさにそれである。聞く、示す、悟らしめる、入らしむる。この「開示悟入」は、「守・破・離」に比べると「開」が新しい点。

(3)しかし、インドの元の法華経には「開」はなく「示悟入」となっていて、これならほぼ「聞思修」と同じ構造を持っている。それを中国で訳したときに「開」がついたというのが、これは素晴らしいと思う。まず学習者の心を、そしてこれから学ぶ世界を、開かなくてはならない。

6. (1)要は教育の「教」と「育」両方の面を大事にしていかななくてはならないということ。

(2)そういう意味で教える師であるという「教師」という言葉にどれだけ大きな責任が含まれているか認識することが大切である。教師がいい加減な気持ちで、子どものレベルまで下りていけばいいとか、じっと見守っていけばいい、と断言してはいけない。

(3)そういう教師論をやっているようでは、日本は破滅する。高い世界、深い世界が伝わらなくなってしまうたら国が滅びてしまう。これが私の基本的な考えと言ってよい。

P.38 ~ 40

[コメント]

教育とは教え育てることであることを具体的に示した兵庫教育大学学長の梶田先生の教えは、日本の教育の原点を示したものとする。

- 2009年4月27日林明夫記 -